

## English Garden 第70話

"Cast a cold eye / On life, on death,  
Horseman, pass by!"

W.B. Yeats

「冷たい目を向けよ / 生に、死に。  
馬上の人よ、行け！」

W.B. イェイツ

これはイェイツの自作の墓碑銘(エピタフ)で、遺言の詩といわれる "Under Ben Bulben" ("ブルベン山のふもとで"・"Last Poems"所収)の最後の部分です。

この句は非常に象徴的なので、真の意味をさぐって古くから多くの人の研究の対象となってきました。まず詩全体の内容を大まかに見ていくことにします。

この詩は "Swear by what the sages spoke..." (賢者の語ったことにかけて誓え) という形で始まり、古代の神の知恵を受け継ぐ賢者や妖女、それにブルベン山のあたりを住みかとする妖精 (詩の初めの方に horsemen として登場) を呼び出して、時や次元を超えた彼らからのメッセージとして語られます。

Many times man lives and dies  
Between his two eternities,

二つの永遠のあいだで  
人間はいくたびも生まれては死んでいく

「二つの永遠」とは、民族の永遠と魂の永遠で、古代アイルランド人が大切にしていた思想です。さらに次のような内容が続きます。「人はどのような死に方をしても、愛する者にとっては一瞬の別離にすぎないのだから恐れることはない。地中深く葬られても、また生きている人の心に戻ってくるのだ」

次いで社会の精神的な指導者たるべき詩人と彫刻家へのメッセージとして、仕事にいそしみ、現代の画家たちにも優れた先祖たちの偉業に注意を向けさせ、力を合わせて人間の魂を神の域にまで高めるようにと励まします。

また、混沌とした現代文明の中で育っていく者たちの前途を憂え、特にアイルランドの詩人には、「詩人としての業を学び、伝統を重んじて下等なものさげすみ、優れたものだけを歌え。農民や、乗馬にいそむ郷土や、修道士の神聖さを歌い、やがて来るべき日になお不屈のアイルランド人でいられるよう、過ぎ去った日々を心に留めよ」と呼びかけて、急速に失われていく民族の伝統を存続させることを訴えています。

Under bare Ben Bulben's head  
In Drumcliff churchyard Yeats is laid,

岩肌もあらわなブルベン山の峰を仰ぐ  
ドラムクリフの墓地にイェイツは眠る...

最後の節はこのように始まり、墓碑銘として刻むよう指示して表題の句でしめくくっています。ドラムクリフはイェイツの故郷であるスライゴーの近くの町の名前です。

この墓碑銘の "horseman" は、前述のように、ただの旅人や墓参りの人ではなく、妖精あるいは伝説の英雄など、超人的な存在であると一般に解釈されています。すると "cold eye" というのは、虚無的な意味ではなく、生や死を突き放した英雄たちの醒めたまなざしであることに思い当たります。イェイツが描いてきた多くの英雄の生き方はまさに生死を超越したものであり、彼はこの短い句の中に自分の思いを凝縮したといえるでしょう。この詩全体を読んだあとには、実にすがすがしい印象が残ります。なお、"pass by" (立ち去れ) というのは、古代ギリシャ、ローマの墓碑銘に使われた常套句だということです。(引用の詩の訳は筆者自身による)

参考資料:

『W.B.イェイツ全詩集』鈴木 弘訳、北星堂書店、昭和57年刊。

『イェイツとオリエンタリズム』山崎弘行著、近代文芸社、1996年刊 ほか。

